
IS ~ 白夜の星樹 ~

天宮翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS～白夜の星樹～

【Nコード】

N0884R

【作者名】

天宮翔

【あらすじ】

女性にしか反応しない世界最強の兵器『インフィニット・ストラストス（IS）』の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し、女尊男卑が当たり前になってしまった時代。そんな時代に「世界で唯一ISを使える男」が登場した。それを切っ掛けにある兄妹がIS学園に編入する。

第01話 プロローグ

ある一室からコンソールを叩く音が響く。部屋は薄暗く、誰かはわかりかねないが、モニターに映るウィンドウが開いては閉じると繰り返されていた。

すると突然、コンソールを弾く指の動きが止まる。

「全システムオールクリア。ふう……」

背もたれに体重を預け背伸びする。

声から識別すると女性……のようである。若々しい声だ。

女性？の溜め息を引き金に薄暗い部屋に明かりが灯る。

「お疲れさん」

部屋の扉が開き珈琲の入ったカップを両手に少年が声をかけた。

「ああ。兄さん！」

「おっと。俺の両手塞がってるんだが」

「何よ。ようやく兄さんのコレが完成したのに。別に良いんじゃないかい」

猫のように兄と慕う少年に飛び付き関係ないと頬擦りする少女。

少年は『参った』と言う顔をするも満更でもない様子だ。

「わかったわかった。とりあえず珈琲を淹れたんだ。飲んでからでも遅くないだろ？」

「うう。わかったよー。だけど、飲み終わったらいっぱい甘えさせてね」

「仕方ない奴だなあ」

やれやれと少年は肩を竦めた。

珈琲を飲み終わると少女は宣言通り少年に甘える。少年もそれに応えるように少女を撫でる。

少女は気持ちよさそうに目を細め少年の胸に体を預けていた。

「467番目のコア。東から与えられたIS。俺専用の機体」

少年はモニターに映った設計図のコードネームを読み上げる。

聖天白夜

それは世界に新たな革新を与えるIS。

篠ノ之東から与えられた467番目のコアを使用し、少年の妹にして愛しい少女、神代星菜が兄のために生み出した最高の機体。

彼、神代春樹のワンオフ機

テレビを点けると丁度ニュース番組に当たる再放送の番組が映る。世界で唯一ISを動かせる男子『織斑一夏』の姿が映っていた。そして、今此処で少女『星菜』をあやしている少年『春樹』も、非公開ながら男でISを動かせるひとりである。

「星菜。ありがとう」

「うにゃあ」

「ふふふ。可愛いなお前は」

春樹は日だまりの笑みを浮かべ星菜の髪を撫でた。

……
……
……

季節は3月の終わり。

桜咲く新たな出会いの季節への変わり目。春樹と星菜はある場所に足を運んだ。

「やあ、束。相変わらず耳は生えてるか？」

少年、春樹は『不思議の国のアリス』を思わせるうさぎの少女に微笑んだ。

第02話 天使降臨

IS学園。

アラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、干渉されない（しかし、全く干渉されないわけではないというのが見て取れる）。そのため、他国のISとの比較や、新技術の試験にも適しており、そういう面では重宝されている。

と、簡単に説明すればISに関連する人材を育成、放り込む機関と考えて良いだろう。面倒なこと何よりです、はい。

「兄さんの複雑な表情も素敵です」

街中で目をキラキラとさせる我が妹。

俺にしか目がないようで、他の男子は眼中に入っていない。

将来が心配だがいざ嫁に出そうとすれば……出せないな、うん。

「しかし、まさかIS学園に入ることになるうとは思ってもよらなかった……訳でもないが、女性しかいない学園に入学するのは気が引ける」

「私は兄さんと同じ学園に通えるならどこだって良いですが……あそこは少しばかり嫌ですね」

「ん？ その心は」

「兄さんが私以外の女性の毒牙にかかるかもしれません！」

嬉しいことを言うてくれると思ったが、誤解を招く発言は止めて

欲しいものだ。

周囲から奇異の目で見られて胃が痛いんだけど。と、そのお父さん。警察に電話しようとしないうでよ!?

街中で色々とハプニングが連発したが、ようやく学園に着いた俺と星菜。

まさか本当に警察に連絡されてたとは……。危なく牢獄、監獄逝きだったぜ。

「兄さん兄さん！ この学園とっても大きいですよ」

学園の敷地に入ると体いっぱいワンターンして広さを示す。

とても楽しそうで何よりだ。

最初は嫌な態度をとっていたが学園という新たな環境に興味を抱いたのだろう。

俺は星菜の笑顔に連れて微笑んだ。

学園の敷地に入ってから10分。

編入生ということもあって学園関係者の人が案内すると言われていたが、どうもまだ来ていないようだ。

星菜ははしゃぎ過ぎたのか疲れて俺の膝で寝ている。最初は学園の真っ只中で不純異性交遊のようで人の目を気にしていたが学生の姿は一向になかった。

「しかし遅い」

「くう」

可愛らしい笑みを浮かべた星菜の髪を撫でながら学園を睨む。

約束の時間はとうに過ぎているというのにまだ姿を現さない。

その時、地響きが鳴った。

まるで落雷が落ちたような凄まじい音。落ちたのはアリーナ方面である。

「今のは……」

「……どうしたのお兄ちゃん？」

「少し面倒くさいことが起きた。星菜は学園に行け。約束の教師は此処に来れないようだしな」

「ふえっ？」

「理由はあとで話す！ 今は俺の言うとおりにしてくれ」

俺は目を覚ました星菜にそう告げるとアリーナに向かって走り出した。

後ろで叫び声が聞こえるが彼処に連れて行くのは危険だと本能が告げている。

ネックレスとしてチェーンに通したエンゲージリングを掴み、俺は相棒の名を呼ぶ。

聖天白夜、起動

……

……

…

俺は目の前の光景に驚きを隠せなかった。クラスによる代表が現在までの成果を発揮する場、クラス対抗戦。

不本意ながらクラスの代表に選ばれた俺はセカンド幼なじみ、鈴

音と闘っていた。

それなのに今、目の前に危険な存在が俺たちの前に立ちふさがった。

銃口の照準は俺とポロポロの鈴音を捉えている。恐怖を前にして爪先一本たりとも動かすことが出来ない。

俺の体はまるで金縛りにあつたような状態だった。

動け、動け、動け！！

動けよ、織斑一夏！！

だが、願い叶わずミサイルとビームの弾雨が放たれ、俺と鈴音を襲った。

ISを動かしたによりこの学園に入学した、俺、織斑一夏。女性しか動かすことができないISを男子である俺が動かしたことにより『世界で唯一ISを使える男子』として世界に名を知られることになった。

そして、男子でありながら女性しか入学を許されないIS学園へと入学することになった。

女性しかいないクラス。女性しか存在しない学園。そんな学園生活を送る羽目になったが入学から密度の濃い再会に出会いを繰り返した。

ファースト幼なじみとの再会。

クラス代表戦。新しい友人。

セカンド幼なじみとの再会。
クラス対抗戦。

と、今にあたる走馬灯が脳裏を駆けた。

そう。脳裏に駆けたのだが一向に痛みが来ない。俺は恐る恐る鈴音の見た。

しかし、彼女の身体にはボロボロなのは変わらず、それ以上の異常は見られない。自分の身体も同じである。

ただ違う点は、彼奴は空を見て目を見開いていた。俺は鈴音の見える先を追う。

そこには、紅き機械仕掛けの翼を携えた、白と黒のカラーリングを持つISが佇んでいた。

「そこまでにしてるよ、木偶の坊。これからが地獄。裁きの時間だ」
天使を催した機械仕掛けの天使はライフルを腰にマウントし、背部にクロスでマウントされた鞘から刀剣を抜いた。刃渡り80cmの黒き刃が色彩を変えた。黒き刃は透き通った白銀へと煌めく。

機械仕掛けの天使は更に継ぐ。

判決は言うまでもなく『断罪』だ

その声色は透明で素顔隠したフェイスの中で微笑んだように思えた。

刹那、天使は地上のISに突貫した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0884r/>

IS ~ 白夜の星樹 ~

2011年2月27日08時58分発行